体験活動から豊かな感性を育む

1　はじめに

本校では数年来，複式教育の中にその特性を生かした体験的活動を取り入れ，表現力豊かな子どもの育成をめざしてきている。帝釈小学校との交流学習をその中核にすえて取り組むようになってから今年度で３年目を迎える。昨年度は直接両校の子どもが触れ合う交流を実現することができた。子供どうしの間に友情が芽生え，相手の立場を思いやったり，進んで人と関わり合おうとする積極的な態度が見受けられた。これにより，少人数集団の中で暮らしていると起こりがちな引っ込み思案や表現の稚拙さを解消する糸口が見えてきた。今年度もこの交流を続け，両校の子どもたちが相互によい影響を及ぼし，高まりあっていくことをめざしていきたいと考えている。

昨年度は，帝釈小学校の子どもたちが本校に宿泊し，市街地の暮らしや単式学級の授業を体験するなどの交流をする一方，本校からは日帰りで帝釈を訪問し，自然を相手にした学習活動を体験したり，地方の手料理を味わったりという交流を行った。

（詳しくは，初等教育64号および平成６年度研究紀要を参照されたい。）

今年度は，その裏返しの形で，本校から帝釈に宿泊をさせていただくことになった。その様子を以上に述べることにする。

2　帝釈小学校宿泊交流

(1)　事前学習

６月22日・23日の実施に向けて，子どもたちにめあて意識を持たせるために，複式学級の運営委員で話し合いを持った。めあては，子どもたちの考えを集約して設定した。

めあて　○友だちをふやそう。
　　○下級生が安心できるように助けよう。
　　○自然を楽しもう。（大切にしよう。）

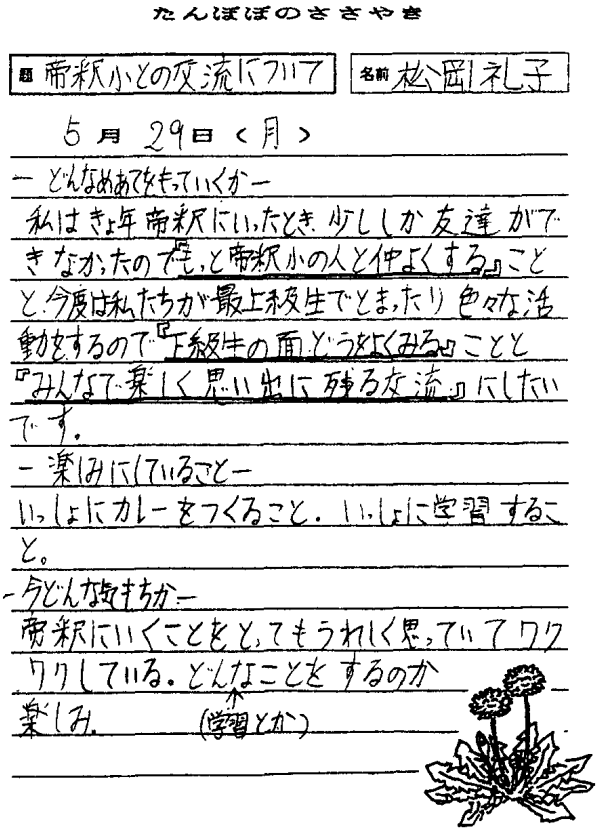
活動内容については，高学年の子どもが帝釈小学校の子どもと直接電話で話をしながら打ち合わせを行った。始めのうちはおっくうがっていた子どもたちも，なれるにつれて，電話をかけるのを楽しみにするようになり，自分も話をしたいという子どもが次々に加わるようになった。

活動の概要が次第に見えてくるにつれて子どもたちの意識も高まってき

た。前回の訪問の際のイメージを抱きながら，自然あふれる環境の中であれもしたいこれもしたいとその日のことを心待ちにしていたことであろう。

〈子どもの感想から〉～5月29日～

○私は去年帝釈小に行ったとき，少ししか友だちができなかったので，「もっと帝釈の人と仲よくする」ことと，今度は私たちが最上級生で，泊まったり色々な活動をするので「下級生の面倒をよくみる」ことと「みんなで楽しく思い出に残る」交流にしたいです。帝釈に行くのがうれしくてわくわくしています。どんなことをするのか楽しみです。


たんぽぽのささやき

題 帝釈小との交流について　名前 松岡礼子

5月 29日（月）

－どんなめあてをもっていくか－

私は去年帝釈にいたとき少しか友達ができなかったので『もっと帝釈小の人と仲よくする』ことと今度は私たちが最上級生でとまったり色々な活動をするので『下級生の面倒をよくみる』ことと『みんなで楽しく思い出に残る交流』にしたいです。

－楽しみにしていること－

いっしょにカレーをつくること．いっしょに学習すること。

－今どんな気もちか－

帝釈にいくことをとてもうれしく思っていてワクワクしている．どんなことをするのか楽しみ．（学習とか）

○去年帝釈小に行ったとき，友だちもあまりできなかったし，あまり学校の中も見ていないので，今度行くときはしっかり友だちも作って，学校も見てきたいです。それに，カレーライスを自分たちで作っていくので，今からとても楽しみです。ぼくは，明日からでも帝釈小に泊まりに行きたくてとてもわくわくしています。

(2)　活動の実際

帝釈を訪れるのは昨年度の10月18日以来，8ケ月ぶりとなる。中秋の昨年とはちがって，初夏の帝釈にはどんなことが待ち受けているのか，子どもたちは高まる期待に胸おどらせて本校を後にした。

緑深い山あい，帝釈川のほとりにある帝釈小学校では，私たちの到着を待ち受けて歓迎のセレモニーが行われた。

すでに顔を見知った仲である。緊張感はなく，なごやかなムードの仲で対面は進んだ。遠く離れて生活していても，印象的な出会いを経験した友だちとは，すぐに仲良くなれるものらしく，子どもたちはすぐにうちとけることができたようである。ただ交流の経験のない１年生や印象の浅い２年生には，緊張の色が伺えた。そのような下級生の気持ちを察して行動することも，今回の交流のめあてになっている。

① 帝釈の自然観察

まず帝釈小学校の高学年児童の案内で学校付近の地形や動植物の生態を観察した。地元の子どもたちの手際のよい案内に敬服しながら，「国定公園帝釈峡」の自然を散策するうちに，本校の子どもたちの表情が心なしか，広島にいるときより穏やかになっているように思えた。

縦割りのグループごとに時差をつけながら現地を回り，「イラクサ」「カキの化石」「カジカ」「クワの実」など普段知ることのできない自然の姿に直接触れることに，いちばん興味を示していたのはやはり高学年の子どものようで，時には質問をしながら，ただ見るだけでなく，鳴き声を聞いたり，味わったり，触ったりというふうに五感を使って観察をしていた。このような経験を重ねることによって五感を研ぎすまし，豊かな感性を育む素地を作ることの大切さを感じた。

高学年では，後日印象に残ったこととして，この活動を挙げた子どもが多く，穏やかな雰囲気の仲にも知的な欲求を満たしながら活動していたことが分かった。

② 夕食作り

夕食は子どもたちの手で作らせたいという本校の要望を入れいただき，縦割りグループごとに係を決め，共同でカレー作りに挑戦した。本校の子どもたちは，これまでに複式学級独自の体験的活動の中で調理も数多く経験しており，高学年にもなると自分たちで要領よく進めていくことができる。この点では，本校の子どもたちが比較的リードをとりながら活動を進めていたようである。

多くの言葉を尽くすよりも，このような具体的な活動の中で交流は深まるものである。昨年まではまだ口を利いたことがない子どもどうしも，係が同じになれば，必要に迫られて会話を交わすようになる。次第に抵抗感がなくなり親しみを覚えるようになる。調理は後で食べる楽しみもあるので，子どもたちの積極的なかかわり合いの姿を自然に引き出すことのできる活動である。

③　交流授業

帝釈小学校の子どもたちにとっては，多人数の授業ですることは滅多にない経験であり，一方本校の子どもたちにとっては，豊かな自然の中で学習することは滅多にできない経験である。双方の要求を満たすために１時間を体育として「サッカー」の学習を実施し，もう１時間を理科として，近くの帝釈川での観察学習をさせていただくことにした。

「サッカー」では，人数の差はあったが，あえて学校対抗の形をとり，競い合いの中で友情を深めていくことをねらった。本校の子どもたちの方が人数的に有利であったこともあって，圧勝の形で終わったが，帝釈小学校の子どもたちの潔い態度に学ぶ所も大きかった。後日そのことに触れて子どもたちに話題を投げかけたところ，不満を出すことが多い自分たちの姿と比較しながら同じように感じていた子どももいた。

「野外観察」では，実際に川の中に入り，肌できれいな水の感触を楽しんだり，つり道具を持参して，釣果を期待とする子どももいたりして，自然と遊ぶことの楽しさを満喫しているようであった。普段からこのような遊びができる帝釈の友だちをうらやましく思った子どもも多かったことであろう。

3　おわりに

豊かな自然の中で，五感を使って活動ができたことや，相手の立場に立って考える姿勢が育っていったことは，交流学習の意義を裏付けするものとなった。また後日帝釈小学校の友だちに宛てた手紙の中に，友だちのよさを見

出し，エールを送っている次のような記述も見られた。

○帝釈小学校のみなさんは，ぼくたち東雲小学校を温かく迎えてくれた１日目，２日目の行動の計画を立ててくれていたのでとてもうれしかったです。帝釈小対東雲小でサッカーをしたとき，ぼくたちが点を入れてもくじけずにがんばってせめてくるところや，みんなで協力するチームワークはすばらしいと思いました。その仲のよさを生かして，これからもがんばってください。

○カレー作りも楽しかったですね。私は，帝釈小の人の包丁づかいがすごくうまかったのでびっくりしました。私は不器用なので参考になりました。

── これも帝釈の自然に感化された心のゆとりの表れであろうか。その子が本来持っている優しさを取り戻すことができたような気さえするのである。

（福島　靖之）